

なきやいけないかなと思っただけです。

○紅谷 総裁選挙が終わって、橋本総裁誕生が平成七年九月です。それから三か月後の平成八年一月に、村山総理は突然辞意を表明されました。

ですから、常会の前に首班指名をするために、急遽臨時会を召集して総理指名を行い、橋本総理が誕生します。政権の枠組みは次の選挙まで続きますが、河野先生が辞め、村山総理が辞められたので、自社さ政権は実質もう終わったというのが正直な感想でした。

○河野 それにしても、村山という人は立派な人だったね。それは日本の国にとつてすごく運が良かったんじゃないかな。とても正直でまともな人が、戦後五十年という節目のときに総理大臣になっていて村山談話を出して、あれは日本の国にとつては良かったことだと思えますね。

自民党総理は随分いたけれども、やはり大平とか宮沢という人は立派だと思いましたが、村山さんは見識もあり、それに次ぐ人だと僕は思いますね。

もう今は九十七、八ぐらいの高齢だけのお元気なようで、一遍会いたいと思っっているんだけどね。

《小選挙区比例代表並立制で初の総選挙》

○紅谷 平成六年一月に細川・河野トップ会談があり、政治改革関連法が成立しましたが、新たな選挙区の区割りについては、選挙区画定審議会の答申を待って十一月に法案が成立し決定しました。

小選挙区制での初めての選挙は平成八年十月でしたから、小選挙区制法案が通ってから二年以上が経過していました。

河野先生の選挙区は、旧神奈川県五区の平塚、小田原、内陸部の秦野、伊勢原、厚木までの非常に広い選挙区でしたけれども、ここが

神奈川県十五、十六、十七の選挙区に分かれました。自民党は河野先生と亀井先生が現職で、内陸部の十六区は亀井先生の地盤でしたが、河野先生は、住んでいた平塚の十五区なのか、出身地小田原の十七区なのかで、随分迷われたのではないのでしょうか。

○河野 それはもう本当に迷ったんです。私の家、河野家は昔から小田原なんです。私の父が選挙に出るときは、小田原には鈴木英雄さんという政友会の大物議員がいて、小田原からはとても出られないというので、平塚に自宅を移すんですよ。

それが、戦争になって平塚は空襲で危ないので小田原へ戻ったんです。だから、僕は小学校、中学校は小田原なんです。

父が死んで後を継ぐということで平塚を拠点としていたけど、小学校、中学校の同級生はみんな小田原にいて、平塚には幼馴染みがないんです。それでも父の支持者が多かったから、小選挙区になるまでに選挙を九回やっています。後援会は若い者も増えてきて、老壮青、みんな平塚を中心でした。

そこで、十五区の平塚でやるか十七区の小田原でやるか、本当に悩んだけど、僕もそう先は長くないし、やはり実家と菩提寺もある小田原にと、さんざん悩んで決めたわけです。だから平塚の後援者からは俺らが育ててやったんじゃないかと怒られました。その上、僕の後を県会議員にやらせようとしていたら、急に太郎が出るというのでびっくりして。全然そんな話はなかったんだけど、太郎は平塚で生まれて育ったから、前からおやじがいなくなったら、小学校、中学校の仲間とここでやるんだと言って、彼は頑張っていたらしいんです。

小田原では、小学校、中学校の同級生がいてやはりありがたいもので、今でも小学校からの付き合いの仲間がいて頼りになるんですけど、悩んだのは、僕は平塚で九回選挙をやったといっ

も、自分でまともに選挙をやったのは三回くらいしかないんですよ。四回目には新自由クラブだったから、全国遊説ばかりで地元の選挙区にはあまり行けないで、女房が全部身代わりをやっていたんです。

そうになると、婦人会の仲間が幼稚園とか小学校のママ友なんですよ。だから、候補者の顔なんか見ないで女房の繋がりでやっているから、女房は絶対平塚でやりなさいと、小田原に行くんなら勝手に行きなさいと言っていたんだ。今では女房も死んでしまつて縁遠くなつてしまいました。

○紅谷 自分の選挙区が分かれるというのがありますが、亀井先生の支援者にかに自分の方で選挙をやつてもらうかというのは、大変なように思えるのですが、如何でしたか。

○河野 それがとても難しかった。

東京で机の上で論じていたところは、これまでライバルだった人たちと一緒になつてもうまくいく計算だった。それは足し算引き算ではそうなんです。でも、選挙区の隣接しているところは、ライバルの亀井さんの色が非常に濃いところなんです。

小選挙区になつて自民党は私一人だから、自民党を支持する人はみんな私を応援してくださいとお願ひするんだけど、昨日まで競い合つていたから、なかなか一つにならないんですよ。組織はむしろ時限爆弾を抱えているみたいで、とてもやりにくかった。

○紅谷 最初の選挙では、対立候補は新進党の候補者だけではなく、もう一人保守系の候補者が出ています。

○河野 全く自民党系で、僕より保守的な人ですよ。政治のことはよく知っていた人だけど、政党単位で戦うというのに無所属でやるわけだから、ちよつと無理でした。

だけれども、このときは、ライバルの票は僕の票に乘らなくて、四五%しか取れていないんですよ。本来、小選挙区というのは五%以上取らないと勝ちじゃないだろうけれども。その後からは五

十%以上取っているんだけどね。

○紅谷 河野太郎さんも前評判は高かったんですけども、三六%しか取れず苦戦でした。

○河野 初めてだったし、相手の池田東一郎という人は新進党で、民主党からも旧社会党の富塚さんがいましたしね。

前評判は、おやじは危ないけれども太郎は大丈夫だと言われている、新聞社は当確が出たらみんな向こうに行きますと言っていた。だから、富塚さんが野党統一候補になつていたら負けているんですよ。そんなことを言えば、僕だつて五割取つていなかったから、野党が統一候補になれば負けるわけだ。

○鈴木〔衆議院事務局〕 河野先生は、世襲に関して否定的なお考えをお持ちでしたが、太郎先生が県連の会議で候補者に選出されたからは積極的に応援されたと聞いていますが、太郎先生の出馬に当たつての葛藤でしたり、また逆に、継いでほしいというようなお考えはありましたか。

○河野 僕は、今でも世襲は余り賛成じゃないんです。賛成じゃないけれども絶対駄目というわけにもいかない、それは政治に関わりたくないという人の権利です。僕は父親として、丸々地盤を引き継いで楽をしてやるような世襲はやらない方がいいと、今でも思っています。思っていますけど、誰でも彼でも世襲だからおかしいよと言うほどの気持ちはないんです。

僕は、息子だけじゃなく秘書もそうだけれど、大学を出ていきなり代議士の事務所に入つてやるのは賛成ではないんです。社会人を二年でも三年でも経験して、それから政治をやつてみたいと思つたらいらつしやいというのが僕の主張なんです。

学校を出ていきなり親の事務所に入つて政治をやるといふのは、ちよつと社会を知らない、本当に分かつていないんじゃないかという気がするものだから。

だから、僕は世襲がいいとは思わないけれども、そういうちゃんとしたルートを踏んで、社会人としてもちゃんと勉強して、社会的にも一定の基礎をもつてからやるなら、それはいいと思うんです。

《内閣の変遷と小渕総理の逝去》

○紅谷 村山総理の辞任後、後継の橋本総理は平成八年一月に総理に就任しましたが、平成十年七月の参議院選挙で、当初の予想に反して惨敗して退陣し、小渕総理が就任されます。

○河野 橋本さんは、選挙の開票を見て畜生とか何とかいろいろ言っていたけれども、終わったら綺麗に引きましたね。

参議院選挙は政権選択の選挙じゃないから関係ないと言って居座った人もいるけど、橋本君は、そこはともきっぱり、同志の議員の方に申し訳ない、自分が責任を取りますと言って引いたんです。それで小渕さんになるんだね。

小渕さんは、僕は同い年で同じ早稲田大学。小渕さんの方が僕より一期早く代議士になって、しかも自民党の佐藤派という本流を歩いて順調に出世して、とても早く総理大臣候補になるんです。僕は一期遅れて、しかも離党して野党暮らしをしていたから、あまり接点がなかったんですよ。

ないんだけど、新自由クラブで連立を組んでいたときに、中曽根さんからヨーロッパに外遊するから与党の一員として一緒に行かないかと誘われたんです。そのときのお供の団長が小渕さんで、その旅行中に小渕さんから、ちょっと二人で一杯飲もうやと言われ、旅先のホテルでいろいろ話をしたんです。そのときに小渕さんは、そのうち我々の時代が来るから、そのときは一緒にやろうみたいなことを言っていました。

しかし、最初の小渕総裁ができたときの総裁選で、僕は小渕さん

ではなく梶山さんを応援しました。

それで、二回目のときに、小渕さんを担げと言ってくる人がいたから担いだだけでしたが、外務大臣をやらないう話がありました。

○紅谷 このときは、自社さ政権は終わっていて、自民党単独から自公政権になっての外務大臣という時期ですね。

○河野 そうでした。

就任してすぐに済州島で日韓閣僚会議があつて、小渕総理と一緒に行きました。それから、半年後に病気だということで驚きました。

○紅谷 小渕内閣で外務大臣として入閣されたのが平成十一年十月で、小渕総理は、予算が成立した直後の平成十二年四月二日に脳梗塞で入院されました。

○河野 初めは箝口令がしかれていて全く分からなかったけど、麻生さんが、どうも官邸の動きがおかしいと言ってきた。その後、脳梗塞で入院と公表され、青木官房長官の臨時代理も発表された。

五人組と言われ、どうしてあれが五人だったのか、本当なら党三役でなきゃいけないんだけど、池田行彦総務会長が呼ばれていないんだよね。

○紅谷 河野総裁のときに党四役にしたので、村上参議院議員会長は入っていて、池田総務会長だけが入っていないんですね。

○河野 僕は栃木県にいて、小渕総理が倒れたと麻生君から電話があつて、すぐ東京へ帰れと言ってますよ。それは大変だと帰ってきたけれども、どこへ行つていいか分からないんですよ。

○紅谷 麻生さんが帰ってきた方がいいというのは、場合によっては河野先生が後継と考へてのことだったのでしようか。

○河野 それも彼は考へたと思いますよ。

○築山〔衆議院事務局〕 沖縄サミットを控えていたので、外務大臣としてそのままやるのもあり得るんじゃないかという話でしたよ

ね。

○紅谷 そういえば、竹下総理が辞めた後に宇野外務大臣が総理になったのも、サミットを控えていたという理由でした。

○河野 そうでした。

しかし、結局は五人の会談で、村上さんが森君でどうだったって言って。あとは青木さん、野中さん、亀井さんですから。

○紅谷 それで、結局森総理になりましたけれども、いろいろ発言や事故もあって、一年余りの短命で終わりました。

《河野外交》

○紅谷 河野先生は、外務大臣を、村山内閣、小渕内閣、森内閣で合わせて三年余り歴任されています。当時は冷戦が終わって東西対立がなくなった時期で、日米基軸は変わらないけれども、日中や日韓関係は今に比べたら随分良かったと思います。

ただ、日本としては、日米基軸だけではなくて、新しく台頭してきたEUとの関係、あるいは中国との関係はどうするかとか、新たな視点を持ってその三年余りの間務められたのかと思いますけれども、外務大臣時代を振り返ってお話を聞かせていただきたいと思いません。

○河野 外交政策に関わったのは、宮沢内閣の官房長官の時からなんです。官房長官という仕事は割合と外交関係、つまり、官房長官が記者会見で発表する事柄の中では外交にすることが非常に多いものですから、官房長官時代から外務省の事務当局とのやり取りが相当ありました。

渡辺美智雄外務大臣が体調を悪くして入院し、官房長官時代に外務大臣臨時代理をすることもあって、その頃から外交問題についての関わりが多かったんです。

それから、カンボジアのPKOに日本が関わったときには、PKOの本部長は総理大臣ですが、総理から国会答弁は副本部長である官房長官がやってくれたいと言われて、国会答弁をやりました。

外務省は国際貢献を非常に重視していたので、カンボジアが少しうまくいき始めたら、今度はモザンビークへ出したいと言いつつ、僕はちよつと慎重論だったから、外務省とは相当ぶつかった経験もあるんです。

村山内閣になって、宮沢さんからアドバイスがあつて外務大臣をやり、一週間後にはナポリでのサミットに行くことになったんです。あれは官房長官時代にやっていたいかなかったら本当に全く外交は白紙で行くことになったけれども、幾らかやっていたものだから、何となく調子は分かっていたんです。

外務大臣をやりましたが、私のかねてからの主張は、一つは軍縮。これは、どうしても日本は軍縮を主張していかなければいけない。軍縮と裏腹で護憲というか、現行憲法において軍縮というのが一つの柱。もう一つの柱はアジア重視。アジアにもう少しフォーカスして当てた外交をやらなきゃならないという、この二つを非常に強く思っていました。

アジア重視というのも、軍縮、護憲と大体方向性は一緒なわけですよ。中国に対しても韓国に対しても、あるいは東南アジアに対して、アジアを重視しますという福田ドクトリンと同じ姿勢を示すと同時に、これは改憲論ではなくて護憲を主張しながら軍縮を主張して、つまり、戦争の被害を受けたアジアの国は、日本の軍力が増えることにはまだ危機感があり、それに対して軍縮と護憲を主張したことが、信用を得られやすかったと思う。

これは、宮沢内閣当時の外交政策の一つの柱でした。その時は、カウンターパートとして、韓国では金大中さんがいたし、中国では唐家璇さんを始めとして割と旧知の人たちがいた。ASEANは初

めはそんなに知っている人がいたわけじゃないけれど、ASEANができて上がって一番やる気満々のときだったから年中会議をやっていた。その会議には北朝鮮もアメリカもオプザーバーで入ってくるし、最初のASEANの会議なんかは、テーブルに座るとアメリカとベトナムが隣同士に座っているんですよ。これは同じテーブルに着くだけでも画期的なのに、それが隣同士で話をする。北朝鮮も参加していて、僕は、北朝鮮の外務大臣とは、割合とちゃんと話をしました。テーブルにつけばそういうことになる。

韓国の金大中さんと僕との繋がりには、宇都宮徳馬さんが、金大中は将来韓国をしょって立つすばらしい政治家だから、君、よく付き合えと言われたのが始まりでした。

○紅谷 金大中拉致事件の際に、宇都宮さんが随分動いていたという話でした。

○河野 そんなことがあったから、金大中さんも命を助けられたみたいな気持ちも多少あったんだと思うんです。

金大中さんは光州事件の後、死刑判決が恩赦で自由の身になって、しばらくアメリカへ行っただけです。

それが、次の次の大統領選挙に突如として出てきて、あれよあれよという間に有力候補になったと思ったら当選するわけで、僕もびっくりしましたよ。

その頃僕は無役だったのに、金大中さんは個人的な手紙をよこして、就任式に参加してもらいたい。できれば就任式の後に、二人で飯でも食おうじゃないかと思うんですよ。びっくりしたけれども、とにかく行ってみようと思って行ったら、何か特別席みたいなところへ連れていかれて就任式に出て、大統領だから就任式の後いろいろな仕事があると思うけど、二人で飯を食べようと思うんです。こうやって君と食事できるのが一番嬉しいと言って、とてもいい関係でした。

そんなことがあつてから、今度は僕が外務大臣になるわけですよ。それで金大中さんも、私が大統領をやつて君が外務大臣をやつて、本当に二人で今までの友情を両国関係に生かさなきゃ駄目だと言つて、それで随分深い付き合いをしました。だから、恐らくあの頃の日韓関係というのは特別良くて、文化の開放をして日本の映画も韓国で見られるようにし、音楽も聴けるようにした、そういう時代です。

中国は、唐家璇という割と深く長い付き合いだった人が外務大臣になつて、随分頻繁に行き来をして、彼が日本へ来たときは一緒に箱根の温泉に入ろうといつて、二人きりで入るような仲。だから、本当に人間的な、相つきつい冗談も平気で言い合えるような仲でした。だから、日中関係でいろいろな事件があつても、唐家璇に直接会つて話をするとう理解が得られやすくなる。そういう国と国との間も非常にいい関係ができましたね。

そんなことで、アジア重視の外交が非常に進んで、そうしているうちにEUとの関係をもう少し考えなきゃいけないと思ひ始めたんです。

EUができた頃は、日本へ代表を送ってくるけれども、日本の外務省は一国を代表するのだから大使として認めないんです。顕著なのは、信任状を一切奉呈させない。天皇陛下はもちろん、総理大臣も駄目。外務大臣も受け取らないと言うから、せめて外務大臣ぐらいは受け取つたらどうなんだと言つたんです。EUの代表を外交的に代表として認めてほしいというのを、僕らがサポートしてだんだんできるようになつて、そんなことから、EUの歴代の大使が僕のところへ挨拶に来たり遊びに来たりするような仲になりましたね。

僕は、日・EU関係をもう少し進めようと、フランスのパリで、きつかけになるスピーチをしたんです。「日・EU協力の十年」と

いう、今年から十年間の間に日・EU関係をより深くしたいという演説をして、それをEU側はとても喜んで、日本側も、僕は外務大臣を辞めた後ですけれども、その演説をきっかけにして日・EU協力の十年というのが始まって進んだんです。フランスからレジオン・ドヌール勲章をもらったのは、そういうことからなんです。

それから、その次に日本が取り組まなきゃならないのはイスラムとの関係じゃないかと考えたんです。

イスラム教の人は世界に十億億といえるのに、これに対する日本の態度は腰が定まっていけないんです。だから、イスラムとどう取り組むかということをしつかりやっていかないと駄目だと思って、外務省の中にイスラム研究会というのをつくって、外務大臣はもちろん参加し、局長、審議官クラスで勉強したいのは集まれば、月一回のペースで東大の先生なんかに来てもらって、イスラムについて話をしてもらった。それで、イスラムに日本はどういう姿勢で取り組むかということを考えて、スピーチ原稿を作ってカタールへ行ったんです。

それは、ちょうど国連が文明の調和と対話というのをやろうと言い出した時でした。僕はカタールの演説で、日本とイスラムとの間で文明間対話をやろうという提案をして、それから毎年、両方の学者が集まって対話をする。それは割と上手くいって、十年近く続いたんじゃないかな。

このように、アジアをやり、ヨーロッパをやり、イスラムをやつて、本来ならアメリカをやらなきゃいけないんだけど、アメリカとは例の沖繩の少女暴行事件があつて、沖繩基地問題が中心になりました。

それで、つくづく思ったのは、確かに日本外交の基軸は日米で、これを一番大事にしていかなきゃいけない。中国もあるしアジアもあるけれども、やはり基軸は日米です。ただ僕の感じでは、日米間

が基軸と言い、日本側は軸の棒の端をずっと持っているけれども、アメリカはしょっちゅう変わるんですよ。トランプと思うと、今度バイデンですごく変わるのに、日本はとにかく大事な基軸だと言っているけれども、その軸の端だけ持っていればいいというものでもないと思いましたね。

○紅谷 さらに、河野大臣の非常に強い思い入れから外務省の尻を叩かれたのが、国連改革であり、核廃絶の決議案の提出だったと思います。

○河野 軍縮とか核廃絶というのは、僕の政治家としての一つの目標だったから、何とかそれをやりたいと思って、自分でやること何かと思っていたんです。核保有国のリーダーが広島を直接見てくれることが一番いいと思ったけど、なかなか来ないんですよ。それならこちらから持っていく以外にないと思って、一議員として、広島から被爆直後のフィルムを借りてモスクワで映写会をやつて、被爆直後の広島の記事映画をモスクワ市民に見せたことがあるんです。ワシントンDCでもやりました。

国内では広島で軍縮大会に出席したり、いろいろやってみたけど、個人では所詮限界があるなとつくづく思いましたね。

外務大臣になって、国連で核廃絶の決議を出そうと言っても、外務省は全然乗ってこないんだ。よくよく聞いたら、日本は国連で決議というものを一遍も出したことがないと言ってますよ。弱小国でも決議案をいっぱい出してきているから、これを出そうと言ったら、日本は核の傘に入っており、国連ではアメリカ、フランスなんかの仲間になっていながら、核廃絶で核保有国を非難することはできないという。それでもどうしてもやるとさんざん言つて、ようやく究極的核廃絶の決議案を出すことになったんです。

決議文を作るのはなかなか難しかったけれども、そのときの事務局はすごく能力のある人たちで、立派な文書を作つて出して、大

差で決議が通るんです。

それ以来三十年近く毎年同じ決議案を出して通っていて、通る毎に外務省が喜んで報告に来るから、こんな同じものを三十年もやるということは核軍縮が全然進んでないということじゃないか、やるならもう一歩も二歩も前進したものをなさなきゃ駄目だよと、この頃は言うんだけどね。それでも、国連で究極的核廃絶という決議が通るといことは、本当に画期的だったんです。

それからもう一つは、これは全然方法が違うんだけど、非核地帯というのをつくるということ。それは中南米やニュージールランドの方で非核地帯をつくったりしている。この非核地帯をたくさんつくって、その非核地帯が地球儀を全部覆ってしまえば核廃絶になるんじゃないかと思って、それを称賛して、もつとやった方がいいと言っているんです。日本は提案しているけれどもできない。つまり、北東アジア非核地帯というのをつくろうじゃないかというところ、中国と北朝鮮が核を持っているから非核地帯にならない。でも、持っているでも使わないという意味で非核地帯をつくれないうのは中国で提案したこともあるんだけど、なかなか進まないんだよね。これも僕の外交政策の主張の一つなんですよ。

随分やったつもりだけど、考えてみればそんなことしかしていません。

○紅谷 三年余りの外務大臣の間は、国会で外務委員会等へ出席されて説明し答弁されていましたが、国会というのはどういう存在で、どのような印象をお持ちだったのでしょうか。

○河野 国会は、外交を進める上で非常に重要なんです。

例えば、国会の与野党の力関係を考えながらでなければ交渉はできません。向こうから何か言われても、いや、国会で反対されますから呑んで帰るわけにいきませんか、国会を口実に使うこともあります。とにかく国会というのは大事な存在です。

だから外交交渉のときには、憲法上の制約とか、国会の決議があるからと言って交渉を頑張ることもありました。

また、国会は民意の集まる場所ですから、その国会に説明して理解を得るだけの説得力が必要で、外国もそれは分かるわけです。だから、国会は外交上は裏ではとても尊重されているけれども、一方で、実際の外務委員会は、条約を成立させなくてはいけないから条約の審査を優先して、本当の外交問題、外交政策についてフリートーキングすらあまりできない。もつと意見を交換するような外務委員会であってほしいと思うけれども、そういうのは余りなかったんです。

○森元〔衆議院事務局〕 河野太郎先生が外務大臣になられた際には、外務大臣の経験として何かお話しされたこととかはあったのでしょうか。

○河野 彼はアメリカに四、五年留学していたんです。ジョージタウン大学では、その後国務長官をやったオルブライトさんのゼミです。そのせいか、彼はとても固いんですよ。外交ってそんなに固くはできません。僕が彼にいつも言うのは、外交というのは百点を取ろうと思っても百点は取れないものだよと。

外交で大事なことは、お互いが最後は合意しなければならぬから、双方が合意しなければ外交交渉というのには上がらないわけです。幾ら論破されても論破しても、俺が百点で相手が零点になったら相手は絶対手を握らないから合意はできないわけです。まあ早い話が、お互い六十点ずつで我慢すると、相手も本当は四十点なんだけれども何か六十点取ったような気分です、いいよ、じゃと言って手を握って初めて外交というのは合意ができるんですよ。決定的に何か物的証拠があったりなんかする時には違うけれど、普通の外交交渉というのは、お互いが六十点で満足すると言って手を握らないと駄目なんです。

ただ難しいのは、国へ帰って、百点を求めている人に六十点で合意したと説明することなんです。そこが若い人には理解が難しい。長くやっていると、ここは譲って、別のところで譲ってもらおうという場合もあるんです。人間関係も重要です。僕が外務大臣を三内閣でやった間に、アメリカの國務長官は、クリストファーとオルブライトとパウエルと三人替わった。

《宏池会の退会と大勇会の結成》

○紅谷 河野先生は、自民党に戻られて、宮沢先生の勧めで宏池会に入会されました。いろいろな反対があり、皆さんから歓迎されたというわけではなかったようですが、宏池会に入られる。

宏池会は、加藤紘一先生が中心に進んできていたという経過がありました。村山総理退陣後の総裁選では、加藤先生が橋本さんを推して、河野先生は結局は出られなかった。また、小淵さんと梶山さんが総裁選で争ったときは、梶山さんを推す河野先生と小淵さんを推す加藤先生で、宏池会の中でも対応が分かれたことがありました。その後、大勇会を結成されますが、そこら辺りの経緯をお聞かせいただけますか。

○河野 僕は、初めて議員になったときは中曽根派です。中曽根派というのは、中曽根さんの思想信条からいってタカ派です。だから、僕は中曽根派にいたけど思想信条は全く合わない。

いつも、中曽根さんが左に行けと言うと僕は右に行っちゃおうし、右と言うと左に行っちゃって、全く中曽根さんとは合わない。

それで、十年後に自民党に戻ってきたときに、声をかけてくれたのが宮沢さんだったわけです。ただ宏池会に入っても、やはり加藤紘一君が宏池会のプリンス。後継者は加藤紘一君とほぼ決まっていたから、僕は入ったけれども別に加藤君とは競うなんていうつもり

は全然なくて、次は加藤君でいいなと思っていた。

僕は宮沢さんに恩返ししなくちゃいけないから、宮沢さんを支えようと思っていたけど、多分加藤君はすごく意識していたと思うんだ。

そうしているうちにリクルート事件が起きて、宮沢さんと加藤君が引つ掛かるんです。そうになると二人は同志の選挙の応援に行けなくて、宏池会の応援依頼が僕に集まったんです。

その中で、僕の応援をひどく多としてくれた人が、粕谷さんとか相沢英之さんとか堀内さんとかで、選挙後に十数人のグループができました。それが大勇会の始まりです。

そうしたら、宏池会で派の中に派をつくる奴がいると言って批判されたんです。僕は別にそんなことはやっていませんよと言ったけれど、そういうのは派として好ましくないと言うわけです。僕は応援に呼ばれて行ったけど、呼んだ人たちも、河野さんにお世話になった、迷惑をかけちゃいけないと言って、それならもったときちつとやらなきやいけないみたいになっていったんです。

そのとき加藤君は幹事長で、例えば初当選した松本純君を呼んで、おまえ、どっちに入るんだみたいなことを聞くわけで、自然に色分けができていった。

そんなことがあって、僕は宏池会から離れたんだけど、それで加藤君たちが蠢動して、宮沢さんのところへ行って、加藤君にそろそろ譲られたらどうですかと談判し、宮沢さんが、じゃ、もういいですよと言って、宏池会は加藤派になった。でも、僕は加藤派に入ったつもりはないので、別にしようとなつたんです。

宏池会には十年余りいたけど、特に後半は官房長官をやり総裁、政権復帰して副総理・外務大臣ですと派閥を離脱していたから、選挙の応援には行ったけど、宏池会の中での活動はあまりしていないんですよ。

《生体肝移植》

○紅谷 生体肝移植についてですが、三十歳で衆議院議員に当選されて、もう三十代の頃から肝臓に異変があつて、それから三十年近く患い、最後は遺書まで書かれたと述懐されておりました。移植手術が終わってから、自分はロスタイムで生きていますとおっしゃっていますけれども、肝臓移植が平成十四年四月でしたので、もう二十年が経過しようとしています。

その二十年の間に議長もされておりますが、率直にこの二十年をどう感じていらっしゃるのでしょうか。

○河野 手術をしたときは六十五歳でした。そのときは、父が死んだのが六十七歳だったので、あと二年ぐらい、つまり、父の年を超えたいものだとの意味もなくちよつと思つていたんです。

手術の例はアメリカでは多かつたけれど、六十五という年齢での手術は極めて少ない。その歳になると、それだけの手間暇とコストをかけても人間の寿命があるから、手術が成功しても、あとどのぐらい生きるかそんなに永く生きられるか分からない。そうするとコストパフォーマンスが悪いわけですよ。

日本で生体肝移植をしているのは大体が子供なんです。六十五での生体肝移植の前例はなかなかないというのも、僕は全然知らなかつたんですよ。

手術は大変な手術で、僕は十五、六時間、ドナーになつた太郎も、十時間かかつたんです。太郎にリスクはないとはいつても、やはり腹を切つて内臓を出すわけだから、もちろんゼロではないんです。

そういう相当なリスクを負つてやるわけだから、僕が思つていた二年くらいは生きたいというのじゃ全然割が合わないわけで、本当はもう少し長くなくちゃいけないんだらうけど、二十年とは思つていなかったし、手術した医者もそうは思つていなかったかもしれない。

僕の場合は非常にうまくいった例の一つだけ、もつと若くて生体肝移植を行つてオリンピックの選手になつた人もいますよ。

年齢がいつてからの手術は少なかつたけど、太郎がすごく熱心で、僕は止めよう、もういいと言つたけど、彼が何が何でもやると言うのでやつて、正直、こんなにうまくいくとは思つていなかったから驚いているんです。

僕は、手術するまでは生きる意欲は減退していたけど、太郎の奥さんから、七年できなかった子供ができるという話を聞かされて、それがすごく生きがいになつて、孫の顔を見なきやいかぬという意識にすごく励まされた。その年の暮れに生まれたんだけど、それがもう大学生だからね。

二十年の間には議長もやらせてもらった。あの手術が終わつたときには、もう選挙はできないだろうと思つていたら、たまたま解散まで結構時間があつたものだから、かなり健康体に戻つていたんだね。それで地元の人なんかと相談したら是非やりなさいと言つたのでやつて、それから議長をやらせてもらいましたよ。

○紅谷 手術されて一年半後に議長に就任されて、それからほぼ六年間の在職、平成二十一年の解散で引退されてから十二年が経過して、今も元気でいらつしやいますからね。

○河野 今は楽をさせてもらつていて何か何とか生きていますけど、手術が終わつた後は、感染症の危険がすごくあると随分脅かされてね。何しろ、食べ物も生ものは駄目、あれもこれも駄目で全然食べられなかつたからね。

まあ、そのとおりのやつたわけじゃなくて、時には一杯飲んだりしていたけどね。

○紅谷 最初に肝臓の異変に気づかれて、肝移植されるまでの三十

年間には、いろいろな症状なり経過があったと思いますけれども、どうだったのでしょうか。

○河野 ひどかったんですよ。随分悪い状態が何回もありました。

三十歳で選挙に当選して、十年間は自民党にいて普通にやっていたら当選できたけれども、その間に少しずつ悪くなっていったようですよ。ちよつと頑張るとすごく疲労感があったけど、僕は人に言わない性格だから黙っていたけど、それが新自由クラブを作った直後にすごく出たんですよ。

自民党の若手のときに、子供がしょっちゅう風邪を引いたりして小児科の医者家が家に来ていて、僕がくたびれたと言うと、その医者が僕を診てくれていたんですよ。

ある時に、僕の調子がおかしいと思ったらしく、血液を採って検査したら異常な数値が出たので、気をつけた方がいいですよと言われたけれども、その時は何だかよく分からなかったんですよ。

その時は治療を全然せずについて、離党するということに、女房が心配したんで血液検査をしたら、ものすごく悪いと言うんですね。とは言ったって、飛び出した後だから、もう行くところまで行く以外にないので、四十から五十までの十年間は、新自由クラブで朝から晩まで全国を回って歩いていたら、どんどん悪くなった。新幹線の中でも毛布をかぶって横になって寝たまま移動するとか、すごい熱を出すとか吐き気が来るとか、そういうことがしょっちゅうあったんですよ。

だからといって入院はできないし、もつと頑張るんだと言って、それで最後はもう動けなくなって何度か入院しました。そのときに明らかに肝臓が悪いのは分かっていたけど、まだC型肝炎という言葉もなくて、医者は非A非B型の肝炎だと。何のことだかよく分からなかったのがやがて病名がついて、それでC型肝炎と診断されたんですよ。

しかし、そのときには治療法はなく進行を遅らせるだけだということで、強力ミノファアゲンというのを点滴で入れるんですよ。点滴に一時以上かかるんだけど、忙しくてその一時間が待たなくて、注射で入れてくださいと先生に言ったたら、そんな事は無理です、と言われたのを何とか頼んで、太い注射器でそのまま血管に入れたら、心臓がどきどきと鳴るんだね。それでも、そのまま飛んでいって電車に乗ったり役所へ行ったり、そんな無茶をしていましたよ。

○紅谷 その時点で、慢性肝炎に移行しているという診断がされていたのですか。

○河野 ええ、そうです。

このままいけば確実に肝硬変になり、肝硬変になったら大部分は肝臓がんになって恐らく回復不能ですから、そこで終わりですという話だったんですよ。

それで唯一の治療法はインターフェロンだけでも、これは効く人と効かない人があって、病気は治ったけれども二階から飛び降りるとか相当強い副作用があると言われて、僕はそういうのは嫌だから断ったんですよ。

そうしたら、外務大臣を辞めて肩書が何も無い時期に、こういふときだからアメリカへ行ったら治療しろと友人に言われて、躊躇してたけどどうしても行けと言われて連れていかれたんですよ。

メイヨー・クリニックというアメリカで屈指の病院へ行ったら診てもらったら、やはり同じことを言われたんですよ。C型肝炎で肝硬変が進んでいて、しっかり診たいから肝臓に針を刺して細胞を取って検査すると言われ、嫌だと言ったけど検査だけはして、こんなところにいるら殺されると思ったから、もう一日待てば結果が出るのに、帰りますと言って帰ってきちゃったんだ。

日本へ着いたら、すぐ報告書が届いて、結局、もう駄目ですという報告書なんです。それでもインターフェロンはやる価値がある

と言われたからやっただけ全然効かなくて、私としては、もうこれ以上人に迷惑をかけたくないから、治療を全部断ろうと思っただけです。

そう思っているときに、娘がアメリカの雑誌を見て、移植という手があるからやろうと言うんです。でも、ドナーがいなくてできないだろうと言ったら、私が提供すると言うんです。しかし、これから嫁に行こうという娘の腹を切って、親が生きて娘は傷だらけというわけにはいかないから、おまえのはもらわぬと言って娘と喧嘩になったけど、どうしてもやると言うんです。

そうしたら医者が間に入って、やはり女性の肝臓は小さいから移植には向かないと娘をなだめているところへ太郎が来て、俺のがいんじやないかと言いだしたんです。我が家はすぐ古典的な家だから、長男がいつも一番偉いんです。それで、俺は長男だから後の責任は全部俺が取ると言うんです。それでまた太郎と僕が喧嘩になって、僕は要らないと言うし、太郎はどうしてもやると言って大分やり合ったけれども、最後は私が根負けしてやることになったんです。

どこでやるかという話になって、僕は順天堂病院に入院していたけれど、順天堂は当時はそういう設備はないし人材もないからできないということ、調べてくれたら東大か京大か信州大の三つどれかがいいでしょうとなって、実施症例が一番多かった信州大にしました。

翌日には、信州大学病院から先生が飛んできて、実に詳細な説明をしてくれて、てっきりその人が執刀するのかと思ったら、別の人が手術をしてくれたんです。

入院したときにはもうほとんど声が出ない状態で、その一か月ぐらいい前まで外務大臣をやっていて、本会議の答弁で一生懸命大きい声を出すけどかすれてしまい、これは駄目だなあと自分でも思っ

ていました。それが、手術をして、集中治療室で二日か三日は全然意識がなくて、目が覚めたところへ先生が来て、河野さん御気分はいかがですかと聞くので、気分はいいですと言ったら、それがすごくいい声でね。声が出たとびっくりして、周りの人もみんなびっくりしてね。声が出るというのはうれしいものだと思っただね。病院からいろいろの人に電話をかけたなら、みんなびっくりしていた。

○紅谷 少し戻りますが、三十代半ばぐらいからいろいろな症状が出たにもかかわらず、仕事を優先して放っておいたとか、奥様が亡くなられたときも参議院選の最中だったのでそのまま遊説を続けられたとか、議員には滅私奉公的なのが多分にあるかと思えますけれども、そこまでして、自分の体や家族よりも政治活動を優先されたのでしょうか。

○河野 今考えると、やはり女房にはかわいそうなことをしたと思っ

ています。自分が総裁で村山政権を支えて、あそこで負けると村山政権も潰れるかもしれないというときだから、やらざるを得ないというか、支えるしかないという感じになっていたんです。薄情な奴だとか、女房が死んだのに通夜にも出ないのかと随分後で言われて、そうだったなあと思うけれども、しょうがなかったんだ。

自分の体も、もうちょっと早くから治療するかもっと大事にすればよかったですけど、新自由クラブの新政運動を始めたなら、もう何か一人でしょっているみたいな気分、手を放すと仲間がみんな倒れちゃうような気がしていたから、とにかく時間があれば全国各地へ応援に行っていましたね。

とにかく仲間を大事にしようと思えば、そのためには敵を倒さないといけないから、僕には必要以上にすぐ敵をつくったんです。僕は自民党の中で一番敵が多かったかもしれないね。それは、ハト派は主張が割と少数派だったから、向こう側から見れば変なことばか

り言っていると思われるので、選挙では自民党批判をする以外には生き残れないわけだからね。

そんなことをしていたから、自分の体をいたわるといふことは思いませんでした。

○紅谷 奥様がお亡くなりになったのが、自民党総裁で副総理兼外務大臣だった平成七年の参議院選挙の最中で、太郎さん始めお子さん達も、そのときには何も奥様のためにできなかったと述べられていました。

○河野 あつという間だったんです。

女房は癌だったんです。五年前に癌の手術をして、もう完全に取れましたからこれで五年間気をつけてください、五年間再発しなければ大丈夫ですと言われて、ちょうど五年目に死んだんです。五年経って良かったと言っていた、その年の夏ですよ。

僕は外務大臣で、ヨーロッパへ行くことになったんです。その頃は、村山総理が奥さんを連れていかないのに、お供が連れていくわけにはいかないので僕もずっと一人だったけれど、外相として女房と一緒にいるのもあるから、今度は一緒に行こうと言って準備をしていたんです。訪問先にハンガリーが入っていて、もう来週には出発だと言っているときに、何か背中が痛いと言いだしたけれど、それでも行くつもりでいたんです。

いとこに医者がいて、診てあげると触ってくれて、ちよつと心配だからちゃんと診てもらった方がいいよと言われて、それでも半信半疑で病院に行ったら、すぐ入院してくれと言われて大騒ぎだったんです。

癌だと分かって、どういう治療をするかというのを考え、女房はしばらくは高輪の議員宿舎で寝ていたんですが、全く内緒で、宿舎のすぐそばにマンションを借りて、女房だけそこに移して、僕はそこを行ったり来たりしていたんです。

そうしているうちにだんだん悪くなって動けなくなって病院に入ったんです。

○紅谷 議長時代に御一緒に高輪宿舎に行ったときに、高輪は女房が病氣だった時に、新聞記者に分からないように近くにマンションを借りて、そこを行ったり来たりして、娘がいろいろ面倒を見てくれたんだよとおっしゃっていました。

○河野 そうでした。そのときは最悪の頃ですよ。

○紅谷 話を戻しまして、手術をされた平成十四年というのは、手術は成功する、ご次男は結婚される、お孫さんも生まれるで、非常にいい年でした。

○河野 あつ、それはそう、本当にそうだね。

次男の結婚は、急がないとおやじが死んじゃうからと急いで結婚して、僕は披露宴に出たけれども意識朦朧としていて何をしゃべったか全然覚えていないし、最後までいられなくて、その翌日に入院して手術したんです。

確かに、次男は嫁をもらうし、長男には子供が生まれるし、今考えばすごくいい年ですよ。本人も助かるわけだから、それ以上いいことはないよね。

○岡山〔衆議院事務局〕 先ほど少しお話がありました、手術のすぐ後は選挙はできないという体調だったようですが、後藤田元副総理のお見舞いがあった、それ以後、どういうふうな政治活動に取り組みうと気持ちが変わっていったのかをお聞かせいただければと思います。

○河野 退院するまでは選挙のことはほとんど考えていなかったね。ただ、孫ができたという聞いて、やはり顔を見たいと思ひ、明らかに心境の変化がありましたね。それまでは運命なんだから逆らうつもりはない。もうこれで死んでも何の不満もないという気分でしたが、子供ができたと言われたら、自分の命はお返ししますから孫はちや

んと生まれてくださいと本気で神様に祈ったね。その頃は遺書を書いたり、いろいろなことをしました。

それで手術が終わって、回復して声も出るようになって電話をかけられるようになったら、太郎が、俺が肝臓を提供したのは何も年寄りには政治をやってほしいと思ってるやっただんじやない、孫の世話でもしてほしいと思ってるやっただんじやないことを何かに書くんだよね。それで、このやろうと思ってる、くちばしの黄色いやつに後を任せるわけにいくかとか言っていたけれども、まだ本気でやろうと思っただけでもないんだ。

信州大学病院がある松本は、どこからも不便だし、見舞いは極力断っていたせいもあって、ほとんど見舞い客はなかったんです。

それでも高倉健という人が気をつかってくれて、実は高倉健さんと僕は床屋が一緒だったんです。高倉健さんが床屋のマスターに、はさみを持って高倉健さんの手紙を届けによこして、それで頭を刈ってくれたんだ。それはすごうれしかったね。

一番の見舞い客は、ある日後藤田事務所から、先生が見舞いに行きましたと電話がかかってきて、ああ、大変だと言っている暇もなく、病室に御夫婦でどうだとうってこられた。

後藤田さんの見舞いは本当にインパクトがあったね。現下の政治情勢はこういう状況で心配だと言われて、しばらくは俺が頑張るけれども、俺はそんなに長くはないから後は君に頼まなければいけない。二〇一〇年頃が一番心配だから、そのときには君が頑張らなくちゃいけないみたいな話をされて帰っていかれた。それはやはり僕にはすごく利いて、期待というか、託されているという思いがあって、次の選挙も可能ならばやろうという気になったんですよ。

それでも、退院して時間がなかったら出られなかっただろうけど、一年半あったから、結構回復したんだね。

○紅谷 臓器移植法が一九九七年に施行されましたが、脳死の認定

が非常に厳しいので脳死での移植は進まず、生体移植が進んでいきましたが、手術の後には随分いろいろな講演をされたのでしょうか。

○河野 はい、行きました。

臓器移植というのはみんな嫌がるんだね。臓器移植を受けた人も言わないし、それから社会も、例えば臓器移植を受けたというだけで貸家に入るのをはねられたりね。それから、肝臓移植という絶対茶碗を共有しないとか、一種の差別があったりする。それで、患者の会からお医者さんの会からも、経験者として講演してくれと言われるんです。僕は大了ることじゃないと思っただけれど、臓器移植を受けたと言っただけで講演に出られる人はいないんだと言ってます。そう言えば、入院して手術をするときに、公表するかしないかで少し親子で意見が合わなかったんです。僕は公表すると病院がプレッシャーもかかるし、取材が押しかけて迷惑をかけるから、終わってから発表しようと言っただけれど、太郎は手術をすることでちゃんと公表しろと言ってます。何しろドナーが言うからこっちは弱くて、くれる人の言うとおりにしようとなった。

太郎は、総務政務官をしていて辞表を一応出したけれども、片山大臣に止められて休暇ということになったんです。

○築山〔衆議院事務局〕 そうやって公表して、当日、カメラマンが病院に来たようですが。

○河野 来たんですよ。あの頃パラッチとかいうのが流行していて、病院の中の廊下にもいるとあって、病室から手術室まで行くのに違う通路を通って行ったんです。こっちは、もうその頃は上を向いて担架に乗せられていたから何だか分からなかったけれどね。

○築山〔衆議院事務局〕 太郎さんはしきりと、美談にはしてほしくないと言われていたようですが。

○河野 彼はしきりにそう言っていました。絶対嫌だと。やはり相当迷惑した人がいるんだよ。手紙が随分来て、父親から、

息子が肝臓をくれないから太郎さんから説得してほしいとかいうのも大分あったようだね。

僕が移植手術を受けた間に、移植手術が何件かあったけれども、それはみんな子供でした。お母さんが子供に肝臓を上げるというのが多かったですね。

○紅谷 調べてみましたら、先生が移植手術を受けた平成十四年に、生体肝移植はもう数千の事例があったのですが、高齢での生体肝移植というのは本当に事例が少なく、太郎さんも、後から調べてみたら手術前の認識と違うことが随分あったと話されていたようです。

○河野 太郎の妻は、子供ができたのに夫がリスクのある手術を受けるというので、すごく動揺したと思うんだよね。だけれども、止めてほしいとは言えないから、どうしていいか分からなかったみたいだね。

それで、太郎は嫁さんを説得するのに、科学的にちゃんと説明ができればいいと言って、アメリカの資料なんかをこっそり集めて、とにかくドナーが死ぬ心配はない、死んだ例はないということをお文のようにずっと唱え続けたけれど、後で聞いたら本当は死んだ人もいたというんだ。ただ、絶対そういうことはないと思っていたんですよ。

《第七十一代衆議院議長》

○紅谷 肝臓の移植手術が終わって、御自分では政治活動はちよつと厳しいのではないか、次の選挙に出ることは難しいのではないかと思われていたというお話でした。

平成十四年四月に手術して六月に退院され、その後、解散が一年半ぐらいいなかったというのもあったのでしょうか、選挙に出ようという決断をされるまでの経過をお聞きしたいと思います。

○河野 手術をする前は、大体寿命が尽きて余命半年くらいかなと思っていたから、自分でも覚悟を決めていたんです。

だから、手術のときは、政界に復帰するどころか生き延びるかどうかだけです。手術も大変な手術で、退院まで二か月ほどかかりました。

退院したときは、これではしばらく生き延びられるなという思いだけでした。

退院から二、三か月は感染症が危ないから、道を歩いていても工事現場や家を壊している現場が一番危ないと言われたり、あれば食べちゃいけない何しちやいけないと、とにかく生きるだけで精一杯でした。

でも、それから段々回復して、十月、十一月ぐらいには議員仲間の会にも出るようになっていたんです。出たからといっても、それだけのことでした。

そうしているうちに解散になったものだから、選挙に出るか出ないかを真剣に考え、この一年半で体力は相当戻ってきていたし、やれないことはないなと思っていたら、みんながやったらどうだと言ってくれて、それじゃ、やってみるかとなったのが六十六歳のときです。

なかなか大変な選挙だったけれども、何とか当選したんです。

○紅谷 手術から選挙に出られるまでの間は小泉内閣でした。その間に、国会ではイラク派遣法が審議され、自衛隊の海外派遣が争点でしたから、小泉総理は慎重を期されたのか、総理・総裁経験者を呼んで意見を聞くという場面がありました。それが手術をされた翌年の春でした。

○河野 そんなこともあって、自分は政治の世界にいるんだという自覚が出ましたね。

イラク問題を前に、アメリカのイラク攻撃に日本がどういう態度